

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成30年 9 月 26 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 医学研究科、糖尿病・内分泌・栄養内科

職 名・学 年 博士課程 3年

氏 名 村上 隆亮

助成の種類	平成 30 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	American Diabetes Association's 78th Scientific Sessions		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Non-invasive longitudinal evaluation of GPR119 agonist effects on β -cell mass using GLP-1 receptor-targeting SPECT/CT		
開催場所	West Concourse of the Orange County Convention Center, Orland, Florida, USA		
渡航期間	平成30年6月22日 ~ 平成30年6月27日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000 円	
	使用した助成金額	250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空費	190,130円
		宿泊・滞在費	80,636円
		その他旅費	39,545円
		学会参加費	39,970円
発表資料作成		7,236円	
(超過分は教室運営費より補填した)			
当財団の助成について	この度は誠にありがとうございました。国際学会への参加意欲が高まり、更なる研究成果の発展へと繋がるのではと感じました。学会によって演題応募時期が異なるため、1年度内に応募機会が複数ある方が活用しやすいと思います。		

成果の概要 / 村上 隆亮

医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科 大学院 (博士課程) 3年

研究集会：第78回アメリカ糖尿病学会学術集会

American Diabetes Association's 78th Scientific Sessions

開催期間：平成30年6月22日 ～ 平成30年6月26日

開催地：アメリカ合衆国、フロリダ州、オーランド、West Concourse of the Orange County Convention Center

次回開催予定：アメリカ合衆国、サンフランシスコ

【国際会議の概要】

ADA scientific meeting は糖尿病学における世界最大の学術集会である。例年、米国のみならず全世界から糖尿病学の最新の研究成果が発表され、糖尿病関連研究者・企業・患者団体などの注目が集まる。また、学会会場では、基礎医学・工学・臨床医学など多分野にわたる研究者同士のコミュニケーション・ネットワークづくり、情報交換が期待される。我々は膵β細胞の定量化を目指して放射性プローブを用いた生体イメージングの研究を行っているが、日本国内では同様の研究を行っているグループはなく、国内学会では活発な議論は行われていない現状がある。本会などの国際学会において活発に議論がなされている。

【発表内容 / 所感】

私は、膵β細胞の非侵襲的観察・定量化を可能にした、新規 glucagon-like peptide 1 receptor (GLP-1R) 標的プローブを用いて、新規抗糖尿病薬が糖尿病モデルマウスでのβ細胞量に及ぼす効果を縦断的に評価した成果をポスターにて発表した。ポスター会場では、興味を持っていただいた参加者と、in vivo イメージング技術や糖尿病モデルでのβ細胞量評価について、議論することができた。また、他の発表者に対し、会場で質問し、交流を深めることができた。一方で、語学力や常に自分の知見を最新の知識へアップデートしておく必要性についても痛感した。また、口演会場でも、基礎、臨床ともに、多くの演題発表を聴くことができた。特に、膵島移植のセッションでは、米国を含め国際的に、この分野の研究者が直面している課題や基礎的な検討する際の障壁について再確認することができ、良い機会になった。また、このセッションの中で、

日本人の口演を聴く機会があったが、質疑応答など語学力が壁となる場面もある中、発表内容に対しては、むしろ参加者が積極的に理解しようとしている雰囲気、姿勢が印象的であった。日本で研究をする身分として、研究内容次第で票がなされる雰囲気を感じたことは自信につながると感じた。会期中、米国に留学中の研究者とも交流を持つことができ、今後の留学への助言を受けることができた。

【謝辞】

本会に参加・研究成果を発表することで、京都大学での学術成果をアピールするよい機会になったと感じています。ご援助頂きました京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。